

琉球大学学術リポジトリ

大学の共通教育の講義を作ることの難しさとやりがい、そして出会い

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 寧子, Ono, Hiroko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41346

大学の共通教育の講義を作ることの難しさとやりがい、 そして出会い

「ランドスケープ論」担当 小野尋子（工学部）

今回、プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーの受賞の報を頂き、非常に驚くと共に、大変光栄に思いました。ご指導いただいた多くの先輩、そしていつも支えてくださった多方面の方々に、この場で、まず感謝をしたいと思います。

さて、今回受賞の対象となりました「ランドスケープ論」という授業のランドスケープとは、日本語に訳しますと、造園とか景観といった意味になります。

私たちの生活を取り囲む空間を、個人の庭のスケールから、街並み、そして景域と呼ばれる大きな風景構造の単位までを対象としてそのあり方を考える学問領域です。私はこの授業を、ほぼ5年かけて作り上げてきて、今回の受賞となったのですが、その間、大学の講義を作るということの難しさを毎回感じながら手探りで進めてきました。

多くの先輩方が経験されていることではあるといいますが、普段私たち大学の研究者が行っている「研究」は非常に狭い特化された分野を扱っています。しかし、「講義」ではその専門分野に初めて接する学生のための体系的な知識の習得を心がけなければなりません。講義によっても異なるかもしれません、ランドスケープ論とは、そのまま造園学を指しているようなものですが、一つの講義といっても、一つの専門分野全体の概論と同じで、庭園史や風景工学の基礎に始まり、制度や現在の社会での課題などを話していくかなければなりません。実は一回一回の講義をもっと掘り下げる必要があることを積み残したまま広く伝えていくので、その分野の専門家としてはジレンマを抱えることがあります。多様な学科からの受講生が集まる共通教育としてはある程度の専門分野を大局的に理解させなければならないため、そのバランスを保つことに一番苦労しているように感じます。専門課程の提供科目と異なり、共通教育で開講されている講義をお持ちの先生方は同じように苦労しているのではないかと思います。

しかし、一方で、概論的な比重が強くなる共通教育の講義を担当することは、自身が所属する専門分野の自分の研究部門以外の勉強を改めて行う作業を要するため、教員自身にとってよい研鑽の場となっていることも実感しております。学生に教えるという緊張感に後押しされて、今まで手薄であった部門に再度向き合うことになるため、振り返ってみると、専門分野全体だけではなく自分自身の研究部門を俯瞰的に捉えなおせることができました。こうした意味で、共通教育を各専門分野の先生が担うということは、教員にとっても非常に意義があることだと考えます。博士課程終了後すぐ琉球大学に赴任し、赴任後の割と早い時期から単独で講義を担当したことは大変ではありました、講義責任によって、私自身とても成長させていただきました。講義内容や学生の指導について、日常的に助言を求めたり、不安を聞いていただけるような関係を保っていただき、暖かな見守りによって私の講義と研究者活動を支えてくれた同じ専門分野の池田孝之名誉教授、清水肇准教授には、本当にお世話をしています。

話は変わりますが、受賞に当たって、授業で工夫をしたことや改善したことなどを寄稿するようにというお話をありました。私などがほかの方々にお話できるようなことはあまりないのですが、この授業について工夫したことと言えば、学びを教材や論文などの座学にとどめず、フィールドを意識することによって、学生が沖縄の現実の課題と結びつけて考えたり学んだりできるように組み立てたことです。学びとなるフィールドを得るために、研究活動においても地域の人々や行政など学内外のつながりを大切にし、自分自身も研究活動を通じて貢献できることを還元しながら、信頼関係を築けるように尽力してきました。沖縄に現存する風土に根ざした風景や、コミュニティで醸成された地域の美化活動など、現実の持つ事実の重みが、講義の内容をより深く、より身近に理解する助けになっていると感じています。こうした点で、私の講義は沖縄という地域の豊かさに支えられたといつても過言ではありません。そして、講義の移動教室の度にバスを出していただいた大学バスの運転手の方々のご協力にも感謝します。

また、改善したことといえば、「講義ではリラックスして丁寧に話す」ということです。私は、講義の前は、いつも緊張して表情も硬くなるのですが、ある時の学生からのコメントで「話が早くてよくわからない」というものがありました。その時分は、講義もできるだけ多くのことを教えたい、講義全体が概論的に広範になってしまって一回一回で話せる量の限界までは伝えたい、と一生懸命でしたが、詰め込んでも伝わらないことには意味がないと考えを改め、仕事で人と接する時と同じように、ゆっくりとひとりひとりを見ながら話すことを心がけました。そして、上記のコメントは自身の講義に臨む態度を見直すきっかけにもなりました。私の場合は、研究に追われて疲れている時などは、やはりコミュニケーションの集中力と配慮が普段とは異なってしまいます。そこで、講義に入る前には疲れすぎてハイになっている時には温かいお茶を飲んで気持ちを落ち着け、体力的なしんどさを伴ってローになっていいいる時には栄養ドリンクを飲むとして、「人に伝える熱量の確保」と「熱弁にならない冷静さ」を保つように、その時々の自分の状態に合わせてコンディションの調整を心がけました。学生に接する態度は、近すぎても突き放しそれでもうまくいかないので、試行錯誤の上、私自身が目上の方に会うときと同じ節度と距離感を意識しながら、学生との距離を同様に取るように心がけました。

受賞でいただきましたインセンティブ経費はシンガポールの視察に用いました。ガーデンシティ（シティ・イン・ザ・ガーデン）として日本でも有名なこの国は、沖縄の都市計画・ランドスケープを考える上で多くの示唆を与えてくれます。周知のとおり、同国は資源もない土地もないという都市国家でありながら、1960年の独立以降、年率10%という脅威の成長率で発展を遂げた国です。国家の成長戦略の中心として、港湾運輸機能の拡充、海外企業立地や海外労働力受け入れの規制緩和と優遇措置をはかり、アジアのハブ機能として特化をしたのですが、同時に緑地政策による都市の衛生美化を企業誘致の要とし、それに成功したのです。復帰以降の沖縄振興計画の中でずっと政策課題であった産業の育成、企業の誘致の参考になる部分が大きいにあり、また、グリーンインフラの整備は地球環境時代といわれる21世紀の中心的な課題になることから広大な基地跡地という種地を有する沖縄県の中でも戦略的に仕掛けていくことが望まれます。シンガポールは、沖縄と気候帯が近く、都市の緑化に適した植栽も日本の本州のものよりも重複する種類が多くあり、

植栽デザインという観点でも取り入れやすいものが多いのも特徴です。今回の視察は1週間と短い期間ではありましたが、普段から仕事を通じてつきあいのありました沖縄県庁の協力も得ることができ、HDB(Housing Development Board)やNParks(National Parks)、URA(Urban Redevelopment Authority)などシンガポール政府機関での充実したヒアリングを行うことができました。これらの成果を今後の授業の中に組み込みながら、今後はより広い視野の中で、沖縄の事例や課題を伝えられるようになればと考えております。

以上、今回の受賞に当たりまして、先輩研究者の皆様、地域の皆様、講義の進行をしっかりと支えてくださった大学事務の方など関係者皆様への感謝を表しつつ、若干の講義での工夫等の報告とさせていただきたいと思います。また、講義の準備で残業が日々度重なり、かつ出張で不在になるなど忙しいワーキングマザーの私に代わり暖かく子供の世話をしてくれた家族にも感謝をしたいと思います。